

六軒茶屋跡

六軒茶屋は長州藩（現在の山口県）の周防国と長門国の間を旅する旅人の休憩の場でした。昔、六軒茶屋（文字通り、6 つの茶屋）には 6 軒の農家があり、急こう配の板堂峠では数キロの間で家があったのはここだけでした。そこで、この農家の住民が旅人に休憩の場を提供し、軽食を出していました。

17 世紀の初めに、長州藩を統治していた毛利家により、日本海沿岸にある毛利家の居宅、萩城から瀬戸内海沿岸の港町である三田尻までつながる街道が開発されました。萩往還として知られるこの街道は、輸送や取引に使用され、また長州藩主が首都江戸（現在の東京）へ参勤交代で旅するときに利用していました。1635 年以降、長州藩主は、徳川幕府より課された参勤交代の一環として、隔年で首都江戸に出向き、江戸で過ごしていました。藩主は、この義務を果たすため、家臣を伴い、大行列を成して、萩往還を旅しました。

六軒茶屋は、藩主とその従者が江戸を往復するときに利用する、指定の休憩場所（「籠建場」）でした。萩と三田尻の間には 6 つの籠建場があり、各場所には藩主とその最高位の家臣のための設備が建てられていました。六軒茶屋跡には、藩主が利用していた建物を一部再建したものが残っています。入り口正面には、2 つの「籠」を置くための小さな屋根付きの場所があります。藩主は、4 人から 6 人の担ぎ手が担いだ籠の一つに乗っていました。2 つ目の籠は予備でした。

藩主の従者は、家臣、護衛、使用人など、約 1,000 人から成っていました。従者は、衣類やその他日用品が詰められた収納箱など、数多くの重い荷物を抱えていました。歴史的文献によると、その重い荷物の中には、敷布団ほどの大きさのある巨大な鉄板もありました。これは、藩主の布団の下に敷き、藩主が就寝中に床の下から攻撃されないよう守るためのものであると考えられています。